

中島敦「山月記」を読む

山下 真史

本稿は、二〇一七年八月一七日に神奈川県立総合教育センター主催の「国語の授業づくり研修講座」の一つとして、神奈川県近代文学館において講演したものに基づくものである。前半は中島敦の人となりについて話し、後半は「山月記」について話したが、その後半の講演録である。高等学校の国語教材として「山月記」を読む場合についての考察である。

はじめに

「山月記」は、中島敦の文壇デビューとなった作品で、初出は「文学界」の一九四二年二月号、「文字禍」とともに掲載されました。この作品は、敦の大学時代の友人で、文部省に勤めていた釘本久春の口利きで、教科書に載ることになったようです。約五〇年以上も教科書に採り続けられ、定番教材になつていて、この小説の前身や、漢語の多い硬質な文体が、高校生や高校の先生方を惹きつける力を持っているということでもあるでしょう。

これから「山月記」について、私の読み方をお話しますが、あらかじめお断りしておきますと、今回は誰がどういうことを言っているというような、これまでの研究を整理して紹介することはしません。また、今回は、典拠

となった「人虎伝」との比較や、『古譚』四編（「狐憑」「木乃伊」「山月記」「文字禍」）の中での位置づけ、といううなことについても触れません。時間の都合上、そういう観点からのお話はしませんので、ご了承ください。

一 李徴と中島敦

さて、この「山月記」について、これまで、主人公の李徴と中島敦を重ねて読む読み方がありました。その大本となったのは、中島敦の奥さんのタカ夫人の文章でしょう。タカさんは「お札に代へて」という文章の中で次のように述べています。

帰つてから、ある日、今迄自分の作品の事など一度も申ししたことがありませんのに、台所まで来て、「人間が虎になつた小説を書いたよ。」

と申しました。その時の顔は何か切なさうで今でも忘れることが出来ません。あとで、「山月記」を読んで、まるで中島の声が聞こえる様で、悲しく思ひました。

——中島タカ「お札に代へて」（『中島敦全集』付録「ツシタラ4」文治堂書店、一九六〇年）

中島敦は南洋に行く前に「山月記」の原稿を深田久弥に預けていたので、「山月記」を書いたのは、南洋に行く前ですが、この思い出は、敦が南洋から帰ってからそう言ったことになっているので、不審な点もあります。しかし、いつ言つたかはともかくとして、敦が「人間が虎になつた小説を書いたよ」と奥さんに言つたというのは本当のことでしょう。タカさんは、「山月記」をあとで読んで、「まるで中島の声が聞こえる様で、悲しく思ひました。」と言つていますが、このように言うのは、おそらく「山月記」の中の〈数年の後、貧窮に堪へず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになつた。〉という一節があつたからでしょう。タカさんにして

みると、敦は、自分や子供たちのために、南洋庁の官吏になってはるばるパラオまで出掛けていった、という思いがあったので、この一節が中島敦に重なって見えたのでしょう。

このような近親者の発言は、李徴を中島敦と重ねて読むという読み方により影響を与えたように思います。実際、重なっているという目で見れば、そういうところは結構見つかります。いくつか挙げてみましょう。

李徴は、「博学才穎」で「若くして名を虎榜に連ね」とあるように、人並みはずれた頭脳の持ち主で、一度江南尉の職に就いたことになっています。江南尉というのは、地方の警察署長くらいの地位だと思えますが、中島敦も京城中学ではほとんど成績一番でしたし、四年で一高に入りました。その後、京城中学では敦は、伝説的な人物になっていたそうですし、一高でも成績上位者でした。東大を出てからは、横浜高女に勤めましたが、そのあたりも似ていると言えは似ています。

また、李徴は詩人を志しながらも、「文名は容易に揚ら」なかつたとありますが、中島敦も「虎符」という作品を雑誌の懸賞小説に三回応募して、三度とも落選していて、小説家を志しながらもデビューできない時期が続きました。

性格について言えば、李徴は、「性、狷介、自ら恃む所頗る厚く」とか、「進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた」と書かれているように、自尊心が強く、人付き合いを嫌う性格ですが、敦も作家を志す若い人たちがやっていた同人雑誌には、一高時代を除いて関わりませんでしたし、プロレタリア文学の仲間にも入りませんでした。よく言えば、孤高の作家ということになるのでしょうか、その点でも、李徴と共通していると言えないことはありません。

もう一つ、李徴は自嘲癖があると書かれています。中島敦にも、自嘲したい思いはあったようです。次の漢詩を見てください。一九三九年、数え年、三一歳の誕生日に詠んだ自嘲の漢詩です。『李陵・司馬遷』の校訂を一緒にした村田秀明さんの読み方に従って、読んでみます。

五月五日自晒戯作

(五月五日 自ら晒わらひて戯たむれに作る)

中島敦「山月記」を読む(山下)

行年三十一 狂生迎誕辰 (行年三十一 狂生誕辰を迎ふ)
 木強嘔世事 狷介不交人 (木強にして世事を嘔ひ 狷介にして人と交らず)
 種花窮措大 書蠹病瘦身 (花を種うる窮措大 書の蠹たる病瘦身)
 不識天公意 何時免赤貧 (識らず天公の意 何れの時か赤貧を免るる)

【注】○誕辰：誕生の時。辰には五という意味もあり、五月の誕生日という意味もこめられている。○木強：木のように頑な。○窮措大：きわめて貧乏。○書の蠹たる：紙魚のこと。○天公の意：天の意思。

この詩は、簡単に言くと、自分の狷介な性格のせい、病気のせいで、貧乏生活を送っているが、天はどういうつもりなんだろうか。天は何時になつたら、赤貧を免れさせてくれるのだろうか、と詠んでいるものです。自分の力で貧乏生活からどうにか抜け出したいと思っているわけではなく、なんだか、性格も病氣も貧乏も、天のせいになっているという感じですね。自嘲的に作っただけで、敦が本当にそう思っていたかどうかは分かりませんが……。ちなみに、中島敦は、ぜんそくが持病で、その薬代が家賃と同じくらいだったそうです。給料の四分の一くらいかかってたそうで、家計は火の車でした。タカ夫人は「薬代が無いときなど、道を歩きながら、お金が落ちてゐないかと、本気で考へたりしました」と回想しています。

このほかにも、一九三九年の元旦に、杜甫の詩を大きな包み紙に書き写して、最後に自嘲して書き写した、と書いたものも残っています。元旦に、一年の計を立てるところか、自嘲するというわけですから、中島敦の心中、察するにあまりある感じですよ。

李徴と中島敦の重なる点について、もう一つ、指摘しておきましょう。李徴は、「己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもあるのだ。」と言っていますが、それと似た話として、中島敦が、中村光夫という評論家のことを評した話が残っています。中村光夫は東大で中島敦とほぼ同期

で、年齢はちよつと下ですが、知り合いでもありました。その中村への寸評が伝わっています。横浜高女の同僚だった山口比男氏の発言です。

中村光夫の著作——それが風俗小説論だったか、何か、記憶がはっきりしない——が、新聞紙上で大変好評だった時のことである。(一九三六年の「二葉亭四迷論」が池谷信三郎賞を受賞したことか——引用者)

自席から立つて近づいて来た彼は、その朝刊を手持っていたが、光夫の記事の所を指しながら「彼ほどの才能でも努力すれば斯うなる」といったが、あとは何もいわずに自席へ戻って行った。

押し殺した様なその声、口惜しそうなその横顔、私は、後輩に先を越された彼の心情を思い、黙って後姿を見つめていた。

——山口比男『汐汲坂——中島敦との六年』(えつ出版、一九九二年)

中島敦は評論家を目指していたわけではないのですが、文壇に認められるという点では、先を越されたという悔しさがあったのでしょう。乏しい才能でも専一に磨けば、堂々たる詩家になれる、という李徴の発言は、中島敦の発言とも重なるでしょう。ちなみに、山口さんによれば、中島敦は人にあだ名をつけるのがうまかったそうで、山口さん本人は、大柄な割に小声でしゃべる癖があったので、ヒッソリーニと呼ばれていたとのこと。もつともあだ名をつけるのはうまかったにしても、私に言わせると、作品の題名をつけるのは今ひとつという感じがします。「趙大煥と虎狩」とか「ツシタラの死——五河荘日記抄」とかいう題では、なんだか分からなすぎて、読もうという気にならなと思いますけどね。

さて、李徴と中島敦が似ている話の続きですが、李徴の数少ない友人である袁修は、敦の友人で、ドイツ文学者の氷上英広を思わせるという見方もあります。ニーチェの研究者として有名な人です。この氷上さんが、奇遇なことに、実際、敦の没後、妻子の生活の相談に乗ったり、あれこれと面倒を見てくれたようです。

今お話したように、李徴と敦は重なるところがありまして、「山月記」を中島敦が自分のことを書いた小説として読む、というのは、一概に退けられるべきものでもないと思います。中島敦が作家を志しながらもそれがなかなか叶わなかった時期の苦しい思い、悩みが告白されているのだ、と考えても、それは別に間違っているわけではありませぬ。中島敦に限らず、近代の多くの小説の主人公には、作者自身の姿が何ほどか重ねられていると言つてもいいわけだ、泉鏡花にも谷崎潤一郎にもそういう小説はあります。

しかし、主人公と作者を重ねる読み方は、小説を文学作品として理解するという点では問題があります。作者が、現実の体験を元にして、フィクションという形に作り上げたものを、現実を引き下ろして理解することになつてしましますし、そのため、小説の仕掛け、表現の細部を無視してしまうことにもなりがちだからです。

しかし、今、とりあえず、その問題は措いておいて、もう一つ、この小説を道徳の教材のように読む読み方、道徳的な教訓を引き出す読み方を考えてみましょう。

二 教訓を読む

この小説を読むと多くの読者は、なぜ李徴は虎になつたのか、と思つてでしょう。この問いの意味は、あとでよく考へるとして、まず、李徴自身が、自分が虎になつた原因を考えたところを見てみましょう。よく知られた〈臆病な自尊心〉と〈尊大な羞恥心〉が出てくるところです。

己は詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨かうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、

憤悶と慙^{ざん}とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせ、結果になつた。人間は誰でも猛獸使であり、その猛獸に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獸だつた。虎だつたのだ。之が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさわしいものに変へて了つたのだ。

この李徴の述懐について、整理しながら考えてみましょう。まず「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」ですが、これは同じことを言い換えたものです。たとへば、人前に出て何か発言するという場面を考えてみると分かりやすいでしょう。人前に出るのは恥ずかしくて嫌だが、自尊心はあつて、自分は人より出来ると思つている、という人はいると思ひます。言葉の順番を変えて言えば、自尊心があつて、人より出来ると思つているが、積極的に人前に出て発言するのは恥ずかしい、と思つている人、ということになります。「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という言い方は、ちよつと無理に對句にしたようなところがあつて、言葉としてはどうかと思ひますが、言つている内容は同じだと言えます。引用の箇所では、最初に「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」というのが二つ別々にあるように言つていますが、それはレトリックで、そのあとでは「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」は交換可能なように使われているわけです。この二つは同じと考えていいでしょう。

李徴は、こういう性情を持つて生まれたせいで、先生について勉強したり、友達と切磋琢磨したりすることをしなかつたと言ひます。さらにそのせいで、性情がどんどん大きくなつていったと言ひます。続いて、「人間は誰でも猛獸使であり、その猛獸に当るのが、各人の性情だといふ。」と言ひます。ま、こういう説は寡聞にして知りませんが、それはともかくも、この言い方を見ると、李徴は、人は性情とそれをコントロールする機関、理性とでもいふべきものを持つていてると思ひます。次第にそのコントロールが効かなくなつて、性情がむき出しになつてしまつた。そして、自分の場合、性情が虎だつたので、外形も虎になつたという理屈です。

李徴の説明を追うとこうなりますが、しかし、まあ、何と奇妙な論理かという気がしますね。自分が「臆病な自尊

心」とでも呼ぶべき性情の持ち主だったと思うのは、分かりませんが、人間は誰でも猛獣使いだというのは、理解できないですね。人の性情には、引つ込み思案でおとなしく、人と争うのを嫌う、というようなものもありますが、そうだとすると、その人はどんな猛獣を飼っていることになるんでしょうか？ 性情を動物にたとえれば、鳩くらいでしょうか、鳩は猛獣なんでしょうか？ さらに、〈臆病な自尊心〉〈尊大な羞恥心〉というのが虎に当たるというのも理解に苦しみます。虎は威張っていいさうだから、自尊心はあるかも知れないけど、本当は恥ずかしがり屋なんでしょうか？ 虎は猫の仲間だから、恥ずかしがり屋ってこともあるんでしょうかね？ 仮に、百歩譲ってそうだったとして、さらに、李徴の論理が正しく、外形が内心にふさわしいものに変わって虎になるものとすれば、他に、虎に変身した人もいることになりそうです。そうだとすると、動物園で虎を見て、「あの虎、誰だったの？」って思うことになるわけですが、それでは笑い話になってしまいますね。

つまり、ここでの李徴の論理は全然論理的ではないということです。しかも李徴はここで、自分の生き方について反省しているかという点、どうも、そうでもなさそうです。自分の性情が勝手に大きくなってしまつて、それを止める術はなかった、そもそもこういう性格だったんだから、しょうがない、と言っているようにも聞こえます。ですから、ここは、虎になった理由の説明をしているわけではなく、むしろ、自分のせいではない、と言うためにこういう理屈を言っている、と理解しておくべきところなのです。

実際、李徴は、先ほどの引用の前に、虎になったことについて、〈分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。〉と言っていたわけですし、なぜ虎になったか、という合理的な説明は李徴自身にも出来ていないし、ましてや、われわれ読者にも出来ないということです。当然と言えば、当然のことです。

にもかかわらず、これまで、この小説を読み解くときには、なぜ虎になったのか、という問いを立てることが行われてきました。合理的に答えられるはずなのに、そういう問いが立てられてきたのは、なぜなのでしょうか？ それは、実は、虎になったということのある状態の比喩として考えているからでしょう。虎になったことを、ある状態になったことの比喩であると考えれば、こういう問いは成立するわけです。では、そのある状態というのは何か、と

いうことですが、これは本文に（獣に身を墮とす）という言い方があるところから、人間のあるべき姿から墮落した状態、あるいは、人間性の欠如した状態と考えることが出来るわけです。なぜ虎になったかは、合理的には答えられませんが、なぜ墮落したか、とか、なぜ人間性を欠如させることになったかという問いには、一応答えられるわけ、「山月記」では、従来、そのようなことが問題にされてきたわけです。そして、なぜ人間性を欠如させることになったか、と言えば、先ほどの引用箇所にあつたように、師について学ぶとか、友人と切磋琢磨するとかいう姿勢がなかつたからということになるでしょう。あるいは、別のところで李徴自身が述べているように、妻子のことよりも自分の詩のことを優先したのがいけなかつた、と言うことも出来るでしょう。敷衍して言う、師や友を持たず、家族を大事にしないような、傲慢な態度でいると人間性が欠けてしまう、切磋琢磨や人との交わりは大事だ、という教訓がこの箇所から引き出せることになるわけで、「山月記」は、こうした点で、高校生向けの教材として好まれてきたでしょう。

もっとも、こうした読み方は、実はかなりおかしいと思います。師につかず、友と交わらず切磋琢磨しなかつたという状態、また、家族に対する思いやりもない状態が、すでに人としてどうか、と思える状態なわけですから、その人が、人間性を失う状態になったというのでは、当たり前のことを言っているだけです。人間性が欠けていたから、人間性を失った状態、即ち虎になった、と言っているのと同じで、これでは何も説明していないことになるでしょう。つまり、実は、虎になった状態を人間性が失われた状態の比喩として考えると、トートロジーになってしまうのです。では、どういう状態の比喩と考えればいいのか、ということになるわけですが、それはあとでお話します。

三 〈何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所〉について

もう一つ、この小説でよく問題にされる箇所を取り上げてみましょう。袁儻が李徴の詩を聞いて（何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか）と感じる箇所です。

しかし、袁倬は感嘆しながらも漠然と次の様に感じてゐた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑ひない。しかし、この儘では、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないかと。

これについては、従来、いろいろ言われていて、「人間性が欠けていた」というのから、逆に「詩の鬼になるほどの非情さが欠けていた」というようなものまで様々あるようです。ただ、袁倬がこのように感じた文脈を辿ると、作者の素質は第一流に属するが、このままでは、作品が第一流にはならない、と言っているわけですから、素直に読めば、素質以外の何か欠けているということになります。それは何でしょうか？　ここは詩の話ですが、スポーツの例を考えてみると、分かりやすいんじゃないでしょうか。身体能力は恵まれているけど、一流の選手になれない人っていると思うんですね。マラソンでも野球でもいいんですけど、素質はあるけど一流になれない人はいますね。「永遠に未完の利器」と呼ばれていた選手もいました。そのとき、何が欠けているのかと言えば、ふつう、技術が欠けているということになるでしょう。メンタル、という答えも考えられそうですが、メンタルはすでに持っている技術を發揮する際に欠けているものから、まず技術が必要です。話を袁倬の感想に戻せば、詩の技術の面で、僅かに欠ける点があるということなのでしょう。高いレベルでの微細な技術を習得するには、先生について教えを請うことも必要だし、切磋琢磨も必要でしょう。そう理解しておけば、先ほど引用した述懐にも対応しているわけで、無理がないのではないかと思います。

ただし、そう解釈した場合でも疑問が残ります。一つは、袁倬との別れに臨んで作った即興の詩が、説明的で出来がかなり良くないことです。このレベルの詩しか作れないなら一流詩人からは遠いと思いますが、ま、即興で作ったまま出来が悪かったと好意的に捉えれば、他の詩はもつと素晴らしかったと考えることも出来るでしょう。もう一つの疑問は、袁倬という詩人でもない人が、そんな細かい技術に気がつくのか、ということですが、むしろ袁倬のような素人でも感じ取れる何か欠けていたと考えるべきではないか、と思うわけです。

そう考えると、「人間性」というような答えが妥当性を増すように見えるわけですが、詩から人間性が微妙に欠けているのが読み取れるものでしょうか？ 私は難しいと思います。また、「人間性」とは逆に、李徴が妻子を気にかけてしまったことを「甘さ」と捉え、詩の鬼になりきる非情さが欠如していたという説もあります。簡単に言えば、すべてを捨てても詩に執着しなかつた点が、欠ける所だということです。葛西善藏などのような、周りの人の迷惑を顧みずに、作品を書くことに集中する姿勢が欠けていた、というわけです。しかし、李徴は〈産を破り心を狂はせて迄〉〈生涯それに執着した〉と言っているわけですから、それでもなお「甘い」ということが出来るんでしょうか？ しかし、もそういう姿勢の点において欠けることを、〈非常に微妙な点に於て〉欠けると言うのでしょいうか？

そのほかにも諸説あるようですが、袁愴が感じた〈非常に微妙な点に於て〉欠ける所〉というのは、どうも、この小説の中からははっきり読み取れないということになりそうです。そうなると、今度は、小説の構成上、袁愴がそう感じる必要があつたのではないかと考えることになります。欠ける所が具体的に何なのかは分からなくても、それが無いと小説として不都合なことになるのではないかと。だから、そういう表現を入れたのではないかと。と考えるわけです。ある人は、そう考え、実は、李徴が文句なく素晴らしい詩を書いていたら、文名が上がらないはずがないので、何か欠点があることにしたのだ、という答えを導き出しました。李徴の文名が上がらない理由がどこかにないかとまずいので、詩に微妙な欠点があつたということにしたのだ、という説です。しかし、そうなんではいまいか？ 素晴らしい詩を書いて文名が上がらない人は沢山いるんじゃないでしょうか？ 逆に文名は上がつても、たいしたことのない詩人というものもあるんじゃないでしょうか？ 詩は勝ち負けのあるものと違つて、はっきりした優劣が分かりづらいものですから、優れた詩を書いて文名が上がらないということは十分にありえます。むしろ、文句なく素晴らしい詩なのに文名が上がらなかつたという方が、李徴の苦悩は際立つとも言えるでしょう。そう考えれば、小説の構成上は、李徴の詩が文句なく素晴らしくても問題ない、ということになります。

そういうわけで、話はまた振り出しに戻ってしまいます。いったい、なぜ、〈非常に微妙な点に於て〉欠ける所

という表現が出てきたのか？ 本文を読んでも分からない、小説の構成上の必然性もない、とすれば、残るは、作者がうっかり書いてしまったというような作者レベルの問題になるでしょう。小説は完璧に出来上がっているわけなので、書かなくてもいいことを書いてしまった、ということは起こりえます。「山月記」のこの一節も、作者がうっかり書いてしまったので、読者の混乱を招いてしまった、作者の失敗だったのだ、と考えられるかも知れません。そうなる、一件落着で、中島敦がうっかり筆を滑らせてしまったので、深く考える必要はないし、考えても答えは出ない、ということになります。あるいは、中島敦が失敗などするはずはない、わざと解けない謎を残したのだ、と穿った見方をすることも出来るかも知れません。

では、うっかりにせよ、わざとにせよ、中島敦はなぜこういうことを書いたのでしょうか？ こういう問いが一応立てられるのですが、実は、この問いには正解がありません。そうかも知れない、という程度にしかならないからです。ですので、こういう問いは、研究の領分を超えることです。こういう問いに答えるのは、むしろ、評論家の領分に属することでしょう。私は、研究者としてなら、分からない、と答えるしかないのですが、せっかくだから、今日はちょっとだけ評論家になることをお許しいただいて、お話しすることにしましょう。

中島敦に「斗南先生」という小説がありますが、これがその問いを考えるヒントになるかと思えます。斗南というのは、中島敦の伯父の端はなのこと、この小説は、中島敦を思わせる三造という主人公が、自分と似ていると言われる斗南のエピソードをいろいろと書いていくものです。詳しく説明している時間がないので、斗南についての記述をいくつか抜き出してみます。

- 狷介にして善く罵り、人をゆるすことを知らなかつた
- 狂躁性を帯びた峻厳が、彼には、大人げなく見えたのである。
- 伯父は幼時から非常な秀才であつたといふ。六歳にして書を読み、十三歳にして漢詩漢文を能くしたといふか

ら儒学的な俊才であつたには違ひない。にもか、はらず、一生、何らのまとまつた仕事もせず、志を得ないで、世を罵り人を罵りながら死んで行つたのである。

・ 一生を焦燥と憤懣の中に送つた伯父

性格としては、李徴にもちよつと似ているような気がします。斗南自身、「斗南狂夫」と号していたこともあります。この斗南は、最後、がんの激痛に耐えられなくて、睡眠薬で眠らせて死を迎えるという選択をするのですが、その睡眠中、三造は伯父の性質を一つ一つ検討していきます。

・ ここまで書いて来た三造は、絶えず自分につきまといつてゐる気持——自分自身の中にある所のものを憎み、自身の中に無いものを希求してゐる彼の気持——が、伯父に対する彼の見方に非常に影響してゐることに気が付き始めた。彼は自分自身の中に、何かしら「乏しさ」のあることを自ら感じてゐた。そして、それを甚だしく嫌つて、すべて、豊かさの感じられる（鋭さなどはその場合、ない方が良かった）ものへ、強い希求を感じてゐた。此の豊かさを求める三造の気持が、伯父自身の中に、——その人間の中に、その言動の一つ一つの中に見出される秃鷹のやうな「鋭い乏しさ」に出会つて、烈しく反撥するのであらう。

斗南には鋭さはあるけれど、豊かさはない。豊かさが大事であつて、鋭さなどは、ない方がいい、と三造は考えるのですが、評論家として言えば、こういう考えが中島敦の頭をよぎつて、つい、李徴の詩に（非常に微妙な点に於て）欠ける所がある、と書いてしまつたのではないか、と思ひます。容貌が（峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒に炯々として）いた李徴は、どう見ても「豊かさ」よりも「鋭さ」が似合う人間です。中島敦は、谷崎潤一郎が好きだつたことに鑑みれば、文学においても、鋭さより、豊かさの方が価値が高いと考えていたのではないかと思ひます。

まあ、評論家ならそう言ってもいいですが、研究者に戻って言うと、そうかも知れないし、そうでないかも知れない、と言うしかありません。李徽と斗南と中島敦の三者に重なるところがある、という程度の証拠しかなく、しかも、「鋭さ」しかないことが（非常に微妙な点に於いて）欠ける所」という表現にぴったり当てはまるとも言えないからです。ですので、今の話は、証明できない仮説として聞き流しておいて頂ければ、と思います。

四 青年の挫折の物語として読む

「山月記」から引き出せる教訓は、人と交わって切磋琢磨することを惜しむな、ということになるのでしょうか、しかし、小説家は教訓を垂れるために小説を書いているわけではないでしょうし、読者も小説から教訓を引き出さなければならぬわけではありません。教訓という観点から小説を読もうとすると、小説の全体像を捉え損なうことにもなりそうです。そこで、最後に「山月記」は全体としてはどう読めるかということをお話をしたいと思います。

この作品をなるべく短く要約すると、「詩人として名を成したいという願いが挫折して虎に変身し、友人に自分のつらい思いを語る話」ということになるでしょう。このような挫折の物語は、「詩人になりたい」というところを別の何かへの夢、——ミュージシャンになりたいとか俳優になりたいとか、また、最近では滅多にいないかも知れませんが、政治家になりたいとかいうような夢、——あるいは、あの人を恋人にしたいという願い、——に置き換えれば、若者には共感できる物語になるでしょう。自分の志、夢や願いが、叶わないことが決定したあとに、自分の運のつたなさを嘆いたり、何がいけなかったのか、自分のどういふところが悪かったのか、と考えて反省したり、ふてくされたり、自嘲したりするのは、よくあることです。

そういうふうになると、「山月記」は、何かへの志、夢や願いが決定的に挫折したあとに、その人が感じることで、また、友達にしゃべることをうまく表現している小説と捉えられるわけで、いろいろな状況を当てはめれば、応用が利く、というか、普遍性がある話と言えるでしょう。挫折したときの思いを語ると、たいてい、こういうパターンに

なると言ってもいいでしょう。作品に即して見てみましょう。

李徴は、自分が虎になったことを知ったとき、次のように感じたと言います。

自分は初め眼を信じなかつた。次に、之は夢に違ひないと考へた。(略)どうしても夢でないと思つたら、悟らねばならなかつた時、自分は茫然とした。さうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想つた。

決定的な挫折の経験、というのは、おそらくこのような、世界が失われる感覚、次いで恐怖感、さらに条理の立たない世界を生きていることの怖さ、自殺への誘惑というパターンを辿るのではないでしょうか。しかし、李徴は、自殺せずに虎となつて生き延びます。このとき、虎となつた状態は、李徴の感覚からすると、どういう状態なのでしょう。人間性を失つて墮落した状態なのでしょうか。李徴に即して言えば、これは詩人になりたいという願いが実現不可能になつて、なお、生きていくという、なんともやりきれない状態なのではないでしょうか。李徴は、へたとへ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作つたに似て、どういふ手段で発表できよう」と言いますが、虎になつた状態というのは、李徴にとつては、詩人になりたいという願いが決定的に打ち砕かれた状態として了解されることが出来るようになります。そう言えば、中島敦の「かめれおん日記」の中に「願望はあれど希望のぞみみなき」という表現がありますが、それに近い状態と言えるでしょう。

李徴は、その状態の中で、様々につらい思いを語ります。

今思へば、全く、己おれは、己おれの有もつてゐた僅かばかりの才能を空費して了つた訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露す

るかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰とが己おれの凡てだったのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもゐるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思ふと、己は今も胸を灼かれるやうな悔を感じる。

これは、他人に対する羨望と、自分の怠惰についての後悔です。挫折のあとにこういうふうな思いが起きるといふのもよく分かります。

ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思つてゐるだらう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になつた者でなければ。

同じ身の上になつたものでなければ分らない、と言われると、虎になつた人は李徴の他にいないでしょうから、世界中に李徴の気持ちが分かる人はいない、ということになります。ということは、この独白は、自分の苦しみは世界中で自分一人だけが経験している特別なものだ、己よりも苦しい人は誰もいない、と言つてゐるやうなものです。袁愴に共感を求めつつ、暗に君に分かるはずはない、と、同情を拒絶してゐるやうな物言いです。ちよつと傲慢な言ひ方のようにも思いますが、しかし、挫折のさなかにある人間が、そう言いたくなる気持ちもよく分かります。

天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分つて呉れる者はない。丁度、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかつたやうに。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

現在、獣たちが自分の気持ちを分かってくれないというのはその通りだと思ひますが、人間だった頃、誰も自分の傷つきやすい内心を理解してくれなかつた、と言うのは如何なものでしょうか？ まるで、自分はナイーブだったのに、

周りの人間たちはそういうナイーブさを理解できないがさつな奴ばかりだったと、八つ当たりしているように聞こえます。また、〔己〕の毛皮が濡れたのは、夜露のためばかりではないは、もちろん、川に落ちたため、というようなことではなく、泣いたという意味ですが、素直に泣いたと言えはいいものを、ずいぶん気障な言い方をしているように思えます。しかし、八つ当たりしたり、友達に素直にしゃべらないで、ちよつと格好つけた言い方をしたい気持ちも分かります。

その他に、先ほど引用した、虎になった原因についての自己分析もあります。ここは、先ほど述べましたように、反省しているとは思えないところで、己は生まれつきこういう性情だったんだ、と開き直っているかのようにも読めますが、こういう論理にならない屁理屈を言わざるを得ない気持ちも分かります。

こうしてみると、李徴の独白というのは、決定的な挫折を経験して、立ち直れないでいる状態にある人間の独白として、リアリティがあると言えるのではないのでしょうか。李徴の独白は、全然素直ではなく、挫折の原因が何だったのか、まじめに考えていないんじゃないか？ と疑いたくなりますが、それは客観的に見た場合であつて、李徴に即して見れば、こういうふうに感じたり、考えたりするのは必然だと言つてもいいでしょう。

李徴の独白は、ですから、自分を分析して客観的に語っているのではなく、嘆きを語っているのだと考えることが大事です。そう考えれば、李徴の独白にいくつかの盲点があるのも当然と言えるでしょう。

その一つは、詩人になろうと思つた動機です。李徴は、詩によつて名を成そうと思つた、というのですが、李徴自身は、それがずいぶん不純な動機だとは感じていないのでしょうか？ 名を成したいから詩を選んだというのは、詩が好きだからとか、詩が一番自己表現の形式としてふさわしいと思つたから、というのと比べるとずいぶん不純だと思ひます。詩人とか芸術家とかいうのは、ふつう、有名になりたいから志すわけではなく、そうなるしかなくて、なつているんじゃないでしょうか。李徴は、「虎になつたのは自分の邪な気持ちゆえである」というふうにも考えてもよさうなのに、そうは考えません。

もう一つは、李徴の才能です。李徴は自分に詩の才能があると信じていますが、本当にあつたのか全然疑つていな

いらしいのが不思議です。たしかに官吏の試験には受かりましたし、当時は試験にも詩を作るという科目もあったでしょうから、詩の才能がある程度あったことはたしかです。しかし、それだけでは、詩人としてやっていけるだけの才能があるかどうかは分からないと考える方が自然です。しかし、李徴は、虎になつてから「自分には元々才能がなかったのではないか」という自省はしていないようです。たしかに、「己の有つてゐた僅かばかりの才能」という謙虚な言い方もしていますが、すぐあとに「己よりも遙かに乏しい才能」でも一流になれると言っているわけですから、自分には、結構才能があつたと信じて疑わなかつたということでしょう。

三つ目は、李徴は虎に変身したわけですが、「他のものに変身しなくてよかつた。虎でよかつた。」とは思わなかつたのか、という点です。ご存じの通り、カフカの『変身』では、グレゴール・ザムザは巨大な毒虫に変身します。李徴は、虫のようなものに変身して、袁愔に踏まれなくてよかつた、と思わなかつたのでしょうか？——もちろん、半分は冗談ですが、実は、李徴が、高貴なイメージのある虎になつたことを、自分にふさわしいと考えているところが問題だと思ふのです。

さらに冗談めいたことを言えば、李徴は自分が虎から人間に戻る方法がないか考えなかつたのか、というのにも気になると言えは氣になります。虎になつてからは、結構諦めが早く、どうせ己は虎なんだよ、というような開き直りが感じられないこともないです。

今、李徴の独白の盲点についてお話ししましたが、私は、李徴のことをからかおうと思つてゐるわけではありませぬ。李徴の独白を客観的に見てみることで、李徴の性格、とか人間像が浮かび上がつてくるのではないかと思つてゐます。李徴に共感して読むのではなく、一旦突き放して読んだ方が、李徴の人間像を捉えやすいのではないか、ということですよ。

では、どういう人間像が見えてくるかと言えば、これまでお話ししたことからも分かるように、李徴は社会性がなく、かなりの野心家で、自信過剰で、ナルシストであるということになるでしょう。もちろん、自分のつらい思いを独白する際には、つねにナルシズムがついて回るといふか、自己弁護や自己劇化を避けられないわけですが、この

小説では特にそれが強く感じられるように思います。つまり、李徴というのは、自惚れが強く、自分は特別だと思ひ込み、野心があり、挫折すると大げさに嘆いたり、開き直ったり、反省しているようではない、そういう人間だということ。そして、李徴のこういう姿は、実は、当時の芸術家を志す「青年」の一般的な姿だったとも言えるのです。同い年の太宰治の小説「道化の華」などにも芸術家を志す青年たちの同じような姿が描かれています。青年と言っても、ティーンエイジャーとは限らず、三十代くらいまでのことを考えていますが、芸術家を目指す人は、そのくらしい気概というか、自惚れを持つている方が自然でしょう。そう考えれば、李徴は芸術を志す青年の典型であつて、この小説は、その挫折の嘆きを語るのが主題となつていゝと言へるでしょう。

もちろん、李徴をそのように読めるように造形したのは、作者です。中島敦は、李徴の独白の奇妙さ、矛盾点や盲点、あるいは、野心やナルシズムに気がつかないで書いていたとは思えません。中島は、挫折した芸術家志望の青年の姿というのは、自分も含め、そういうものだと思つて書いているんだと思います。奥さんのタカさんは、中島敦はこれを書いたあと、「切なそうな顔」をしていたと言つていますが、私は、中島敦は「なかなかうまく書けた」と内心得意顔だったのではないかと思います。特に、硬質な漢文体でこういう内容を書いたのは類例がない、と思つて、自信を得たのではないのでしょうか。作家というのは、自分のひどくつらい思いを書いても、それがうまく表現できれば、内心、嬉しいんじゃないかと思ひます。

最後に、もう一度、まとめて言ひますと、「山月記」という作品の魅力は、何かを志した青年が、その志が決定的に挫折したとき、どんなことを思ふか、友達にどう嘆くか、ということ、そのナルシズムも含めてリアルに描いていゝところにある、と思ひます。虎になるといゝのは、全くのフィクションですが、そういうシヨッキングな形を借りて、決定的な挫折をした青年の嘆きがリアルに描かれていゝわけです。この作品の読みどころはこの嘆きにあるんだと思ひます。もちろん、嘆いてどうなるものでもないのですが、嘆きとか悲しみとかの負の感情を表現することは、文学のみならず、芸術のもつとも得意とするところですから、「山月記」もその系列の文学に入るといゝでしょう。

おわりに

私は、最近の高校生のことはよく知りませんが、何らかの挫折を経験した生徒には、李徴の嘆きに共感できる、という人もいるんじゃないでしょうか。志のあるところ、挫折は必ずついて回るわけですから……。もしかしたら、最近の高校生は、大きな夢も野心もなく、処世術を身につけて、知足安分をよしとして、達観して生きているのかも知れませんが、そうだとすると、ちよつと寂しいというか、怖い感じもしますね。

青年というのは、いつの時代も、野心家であり、ナルシストであっていいのだと思いますし、そうであれば、必ず、したたかに挫折を経験し、嘆くことになります。青年がそういうものである限り、「山月記」は読み続けられるのではないかと思っています。